

スポーツを愛して、
そして育てて半世紀

7月7日開催

第50回東和ロードレース大会

何かをやってやる

「ロードレース」という言葉が一般的ではなかった時代、昭和45年9月6日、「気軽にみんなで走ろう」と健脚自慢の住民たちに呼び掛け、大衆マラソンを目標に第1回東和ロードレース大会が開催されました。コースは、下太田小学校〜若宮商店街〜荻ノ田〜前石田とまだ舗装されていない狭いコースを2周。

いなほ陸友会のメンバーが「若さ」と「情熱」を武器に作り上げた大会でした。

みんな手作り みんなで協力

初めての大会は、陸友会のメンバーがゼッケンや要項など手作り。連日連夜3カ月かけての大会準備でした。

第4回大会では、地元商店会がスタート地点にある「アーチ」を作成。地域が一体となつての応援です。

そして、全国からやってくるランナーとの交流、おもてなし。この地域の協力が東和ロードレースの魅力、看板です。



▲砂利道での記念すべき第1回スタート



愛する「ふるさと」は田舎町

全国からランナーに参加いただくからには「心のふれあい」を大切にしたい。

走る友を小さな輪から大きな輪にしていこう、もっこの「ふるさと東和」を見てもらおうという思いから、前夜祭や「民泊」が生まれました。

「民泊」は田舎と都会の「ふれあい」や「交流」を深めるのに大きな役割を果たしました。

他の大会にはないものを

日本初の常設マラソンシャワーが完成したのも東和ロードレース。

メモリアル広場には、歴代優勝者の氏名を刻んだ「悠走之碑」、招待ランナーの足形を設置。アイデアと実行力を武器に新たなことに挑戦してきました。

今年で50年。時代は昭和から平成、令和を迎えました。

記念すべき第50回の東和ロードレース大会がまもなくスタートします。





いなほ陸友会代表
さいとう いちお
齋藤 一夫 さん(72)

50年前、仲間呼び掛け「いなほ陸友会」を発足。メンバーとともに東和ロードレースを立ち上げ、運営。

- 1 島山公園の「マラソンの丘」
- 2 メモリアル広場にある齋藤さんの足形
広場には、今までの招待選手たちの足形も飾られている



昭和45年3月に「いなほ陸友会」が発足しました。『いなほ』は旧太田中学校(現在は統合し、東和中)の校章が稲の穂であり、人間形成に実りがあることを願い名付けられました。

発足した年の9月、結成事業のイベントとして開催を思いついたのが「ロードレース」でした。当時、一般の市民ランナーが参加する大衆マラソンは、東京の青梅マラソンくらいで、福島県内では初めての試みでした。

いなほ陸友会の会員は、22歳の齋藤さんが最年長で大半は高校生。恩師や高校の先生方の力を借りて120人の参加者が集まりました。

他ではやらないことをやろうと、日本初のマラソンシャワーを設置。ロードレースのコース沿いにあるメモリアル広場には招待選手たちの足形があります。これは「ハリウッドスターの手形を真似して作ったものだそうです。」

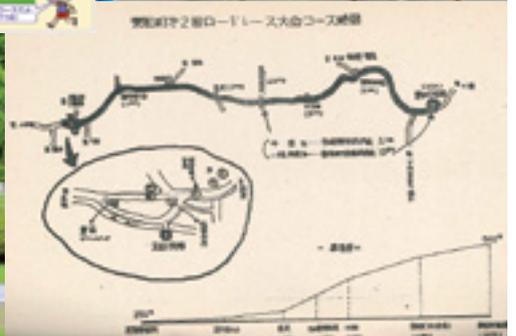
日本にないものに挑戦する東和ロードレースには、たくさんさんのランナーが訪れました。サムエル・ワンジル氏もその

一人。東和に来て交流を深め、北京オリンピック金メダリストになりました。

50回の記念大会について齋藤さんは「こんなに続くとは思いませんでした。自分たちのためでもあり、地域のためでもありました。回を追うごとに数多くの団体が協力してくれる。それが東和の魅力であり看板です。地域の方の力添えがなかったら、ここまで続けられませんでした。」と語ってくれました。

当時、遠方から来る選手のために「民泊」が始まりました。地域の家にランナーが宿泊。採れたての野菜と素朴な人情都会と田舎の交流となりました。それが礎となって、今でも東和には多くの移住者たちが訪れています。

「やりたいと思うことには力が入ります。夢に向かって活動して欲しいし、そんな若者たちを応援したい。青春激走、仲間たちとの反省会でビールかけをしたことが良い思い出です。今の若い人にもそんな気持ちを味わってほしい。」と、未来を担う若者への思いを語ってくれました。



地域全体でおもてなし。ロードレースが50年も長く続くには、地域の協力が不可欠でした。

東和ロードレースの代名詞5kmにおよぶ「紫陽花ロード」には、地域総出で1万株の紫陽花を植えました。

コース脇では小さな子どもたちがランナーを応援。また、地元の太鼓が大会に花を添えます。

名物の「梅干し」も地域の協力から生まれたもの。「自分たちで梅を持ち寄って漬けたのが始まり」の梅干し。今では、毎年ロードレースが終わると婦人会のメンバーで100kgもの梅を収穫。1年後の



下太田婦人会の皆さん

メンバーは27人。ランナーに好評の梅干しは、婦人会の皆さんが1年かけて漬けたもの。地域の「おもてなし」あつての大会運営となっている。



ロードレースのために、自分たちで獲って洗って、そして漬けています。

今年も2カ所のブースで、冷たい麦茶と一緒に、おいしい梅干しがお持ちしています。



開催日 **7月7日(日)** ※雨天決行

スタート・ゴール
太田住民センターグラウンド前ゲート

人気番組「ランスマ」(NHK BS)がレースの撮影にやってくる!

【放送予定】

8月14日(水) 21:00~21:49

今年の招待選手

オリンピック



君原 健二さん

福岡県北九州市出身。マラソン日本代表として、東京オリンピック(8位)、メキシコオリンピック(2位)、ミュンヘンオリンピック(5位)の3大会連続出場。現役時代はフルマラソンに35回出場し、うち13回優勝。2014年には、国際フェアプレー賞を授与される。東和ロードレースには、これまでも幾度となく出場している。

初代山の神



今井 正人さん

南相馬市出身で、祖父が東和地域の針道出身。順天堂大学時代は、箱根駅伝5区で3年連続区間賞を獲得し、「山の神」と称される。トヨタ自動車九州に入社後はマラソンにも挑戦し、福岡国際マラソンでは4位、東京マラソン2019では日本人2位の6位に入賞し、MGCの出場権を獲得。東京2020のマラソン日本代表を目指している。

2代目の神



柏原 竜二さん

いわき市出身。東洋大学時代に箱根駅伝で3度の総合優勝に貢献し、4年連続5区区間賞を獲得。同じ福島県出身の今井正人さんに続き、「2代目の神」と呼ばれた。卒業後は富士通陸上競技部で活動し、2017年3月をもって現役を引退。現在は同社にてスポーツ活動全般への支援、地域・社会貢献活動を行っている。

3代目の神



神野 大地さん

愛知県出身で、現在はセルソースに所属。青山学院大学3年生のときに、箱根駅伝5区で区間新記録を樹立し、「3代目の神」と呼ばれる。大学卒業後は、実業団を経て2018年5月にプロへ転向。東京マラソン2019では日本人4位の8位となり、ワイルドカード枠でMGCの出場権を獲得。東京2020のマラソン日本代表を目指している。

◎大会に関する問い合わせ…東和公民館 ☎(46)4111 Fax(46)4155